

沢村貞子著「わたしの三面鏡」朝日文庫、朝日新聞社 1986年6月20日刊を読む

血のめぐり

1. 「身体でおぼえなけりゃ……相撲は身体でおぼえなけりゃあ勝てません」

大相撲のテレビ中継で解説の親方の、そういう言葉をきくたびに、私はうなづく。

その日の相手の取り口をよく研究して、こうきたら、こう——と作戦をたてることはたしかに大切だろうけれど、相手が思いがけない手口できたとき、パッと受けられるのは、稽古で鍛えあげた身体とカンに違いない。エエと……などと考えていたら、トタンに土俵に叩きつけられてしまうだろう。

2. 私の踊りの師匠はいつも教えてくれた。

「うまくなりたかったら、よく踊りこんだ上で、すっかり忘れることだよ」

3. 小さいとき、私に家事をしこんでくれた母の口癖はこうだった。

「毎日のことなのだから、自然にサッサと出来るようにしなけりゃ、手間ばっかりかかって、家中みんな、おなかせかせちゃうよ」

4. そうは言っても、ゆき当たりバッタリのやり方など、とんでもない。初めはゆっくり、丁寧に考えて……さて、これがいいとわかったら何度もくり返して、自分の身体を馴れさせる——この要領は相撲や踊りと同じらしい。

5. おかげで私は、水仕事も掃除も、永い間に身につけた自己流で手早くやれるから、たすかっている。たまに台所文化の進歩のおかげで、とまどうこともあるけれど……。

P.131 ~ 132

[コメント]

名女優沢村貞子さんの「学び方」、つまり、ものごとの身につけ方についての考え方は素晴らしい。参考になる。